

五百五十坪のいりかしの話

寺島珠雄

土建の仕事のことを「ゲイシャ産業」と呼んだりもする。「ゲイシャ」というのは、日本髪ゆつて料亭の通席に呼ばれて、三味線ひいたり歌をうたったり踊ったりする、あの女性たちの「ゲイシャ」だ。そんなことは何もできなくて、ただ××××一方という「ゲイシャ」もいるが、どっちにせよ、来てくれといわれて出かけて行ってはじめて仕事になる。

土建の仕事とそこが似てるといふわけだ。土建屋も、施主という客がいて、その客の指示した場所へ出かけて行って、客の好みにあわせて仕事をする。

ならば、そんな土建屋の下ではたらく職人、手元、アンコは何だろう。「ゲイシャ」には、三味線の持ち運び、着付けの手伝いをするハコ

ヤという男の従者がついていていたが（いまはあんまりいないらしい。昔はいた）、それとは少しちがうようだ。土建屋が「ゲイシャ産業」であるとすれば、職人、手元、アンコなどは、ひとりの「ゲイシャ」の手であり、足であるということだろうか。あるいは一番危所の××××でもあろうか。

大阪へきてかれこれ十年ぐらい、純粋なアンコもやったし、直行のことも、飯場に入ったこともあった。またそれは一日限りの現場にすぎぬときも、ホーシントか世話役とかの立場になったときもあることなのだが、ふりかえって考えれば、要するにあっちへ行きこちへ行き約十年であった。

そのなかで、忘れられない幾つかのメモをしてみよう。

D 自動車

ここは、大阪ではじめてタビをはいたからよくおぼえている。いま思えば「高度成長時

てくれたのは安さんという、実にいい世話役だった。その後すい分あちこち歩いたけれど、安さんのように仕事ができて人間の切れ味のいい世話役には出会ったことがない。飯場は東区の方に変わった。

門真のある小学校

N組を出て、天王寺公園の手配師からこの現場飯場に行った。基礎コンクリートが打ち終って埋め戻しの場に行き、工事完了までいた。オヤジや監督たちとよく麻雀をやり、たいがい負けたが、その負けの分を、二人役三人役のコマワリ仕事を出させてはつじつまを合わせていた。このオヤジは夫婦別れてたまに釜入あられる、会うと飲もうやと誘い、小づかいあるか？ という。

M組（京波川）

門真の工事完了後、釜入きて一番シケていたときM組へ行った。さきの方がバクバクにやっていた長靴に泥を巻いて歩いてたときだ。オヤジは朝鮮人で、飯場をひらいて二日

代にさきがけた自動車工場の新設だった。当時施工費四十五億円とかいって、元請は大林組、トビ・土工の下請名義人はT組、その下のN組の、もう一つ下のO組の現場飯場に、私は大阪駅の手配師を通して行った。多いときは七十人ぐらいいる飯場だった。このO組はあとで堺の方に定着して、オヤジやアンコがときどき釜入手配にきてるのに会うことがある。ちっちゃな娘が二人いた上の方は、飯場の若い衆と結婚して、そのムコさんが二代目でやってるらしい。Iの飯場ではしゃべったうち一人は手配師に出こ、いまでは自分で飯場を営み、M建設などに人夫出しをしている。私の土方初経験時代、賃金は一日五百五十円、飯代百五十円だった。

D町のK薬品ビル

D自動車さきとしてみたKの留め具になつてから、O組より一上上のN組に引き抜かれてこの工事に行った。地盤からずうと仕事をし、トビもこいでおぼえた。教え

めのところだった。めしを立てて食う飯場はここからはじめてだったが、オヤジもアネゴもいい人間でいいしにしてくれた。

M組は丁工務店の丸抱えで、飯場の建物も丁工務店のものだったが、やがてM組は丁工務店とケンカ別れすることになり、オヤジとアネゴと子供三人と若い衆十五人ばかりは、近くのS組飯場の一部に移った。そのほか十五人ばかりは私がつれて釜のトヤへ集団で泊った。これはオヤジと別れたのではなく、オヤジに頼まれたことだ。このとき、一度に十何人も泊るトヤを紹介してくれたのが、いまこの『竹野者渡世』を店に置いてる荷物預りの④だ。④はそのころ預り所ではなく古着屋で、私は何となく頼なしみになっていた。

M組のオヤジは借金して八尾に自分の飯場を持つた。しかし私は八尾へ行かなかった。

神戸・姫路

私は神戸の三宮へ流れてアネゴをした。三宮はいまどちがってジャンジャン市場があり、

パチンコ屋の前が寄り集まった。しばらくの間、新川筋のホルモン屋の三層に部屋を借りていたこともある。それから姫路のM組へ行つて少しおちついた。姫路では警察のある工場の新築をはじめからしまいまでやり、私がホーシンにされていたので、ヒルメシは十一時半、しまいは四時ということにしてしまつて元請の監督ともめた。だが、やることさえやりやあいじゃないかで押し切った。姫路のM組にはあとでもう一度、とても困つたとき世話になる。

地下鉄N駅

姫路から釜へ戻り、それから八尾に移っているM組へ行つた。古い連中が居つていて居心地はわるくなく、そのうち地下鉄N駅の仕上工事の世話役をさせられた。元請大林組、下請名傷人K組で、M組はK組の下の人夫出しにすぎないのだが、K組の者として世話役をすることになり、大林の事務所にも登録されて赤い太い線入りのヘルメットをかぶった。

M組以外にも二つ人夫出しから土方がきているのも全部見なくてはならず、気骨の折れる役まわりだった。

ひとより一時間早く朝七時に現場へきて段取りをつけ、事務所やほかの職方とのいろいろなことを捌き、よくやつた。土建の仕事に入つて一番よくやつた。M組のなかで数人が弟分のように私に気をくばってくれて、もめごとなども彼らが買つて出てけりをつけ、運送飯夜なんかもイヤといわなかったお陰だ。

またハツリ屋の世話役がなぜか私にいろいろな助言をしてくれた。このひとにはいまでも信りがあると思つてゐる。

飯場では、アネゴが私や私の弟分のようない運中をつれて飲み歩くのが好きで、ちよつとやアネゴのSやくさっぱいYなんかは、そんなアネゴとよくダンスをしていた。

それが原因ではなくて、オヤジがよそに女を作つたのが原因で、M組のオヤジとアネゴは別れてしまい、結局M組口つぶれるが、私

はもうその時分はいなかった。

いま私はN駅で乗り降りすることが多いので、タイルの一枚一枚にも思い出があるように時々センチになる。

M組で親しくしたうちFはりっぱなトビになつて子供が三人、丁は鉄筋屋で自分の現場を持つようになっている。

これからまだまた現在までの話は長いので、けれど、今回はここまで。

ひとことだけ付け加えれば、私はいま書いたようないい飯場、いいオヤジ、いいアネゴだけにふつかったのではない。悪い飯場や、いやなオヤジにもたくさんふつかっている。

キタコの飯場から逃げて、電車チンがなくて釜までの長道中をすきっぱらで歩いたりもやつた。だが、そんなことを恨みがましく思い出したくはないのだ。気が変つたらそれも書くかもしれないけれど。